

みやぎシネマクラドル10周年記念誌

ドキュメンタリー・ダイアローグス

～作り手と市民が繋ぐ未来への対話～



MIYAGI
CINEMA
CRADLE

みやぎシネマクラドル10周年記念誌

ドキュメンタリー・ダイアローグス

～作り手と市民が繋ぐ未来への対話～

宮城にゆかりのある映像の作り手と、その活動を応援してくれる人たちが一緒になって立ち上げたみやぎシネマクラドルが、今年で10周年を迎えることになりました。これまで当会に関わり、支えてくださったみなさまに厚く御礼申し上げます。

会を立ち上げた当時、僕は29歳で、長年かけてようやく完成させた初の長編ドキュメンタリー映画を試行錯誤しながら広めていた時期に当たります。

僕自身、元々は映像制作の下積みも人脈もほとんど無い中、孤独に映画を作ってきた人間なのですが、長編作品完成後は地元の多くの方に支えられ、「自分は一人ではない」と思えるようになりました。それ以降、上映の過程で出会った市井の活動家や映画の作り手たちと一緒に、この先も手を取り合いながら、地元で何かできることはないだろうかという思いを強くしていきました。

今の時代、メディアの進化によって、理屈では一人でもドキュメンタリー映画が作れるとはいえ、現実には、映画を作って公開することとは、決して自分一人の力でできることではありません。そこでは、知識や技術はもちろんのこと、もっと根本的な課題（例えば物事を見つめる姿勢や表現の目的を問い直す作業等）に至るまで、必ず誰かの助けが必要になります。むしろ、他者との関わりがあつてこそ、作品はより豊かな広がりを持つものになると言えます。

しかし、当時の自分がそうであつたように、何の後ろ盾も無い中、ただ「伝えたい」という一心で孤独に映像を作っている人間にとつて、そのような身近に支えとなる環境は一朝一夕にできるものではありません。とくに地方においては、人とリアルに繋がるのが難しい状況が今もあるのではないのでしょうか。

それならば、同じように悩みながら映像を制作

している作り手のためにも、普段からさまざまな立場の人が一緒になつて横の繋がりを作っていくことはできないだろうか。そして、作り手だけがそこから恩恵を受けるのではなく、関わる人みんなが、映像を通して人や社会や表現について一緒に学び、一緒に前に進んでいけるようなコミュニケーションを地元で作っていくことはできないだろうか。そんな思いから、自分の映画の上映を通して出会った人たちに声をかけ、宮城の文化拠点であるせんだいメディアテークと協働で会の主要な活動である「映像サロン」を開始し、現在に至ります。

10年も経つと、当然ながら、自分だけでなく一緒に歩んできた会員にも変化が見られます。普段はそれぞれに映像制作を含むさまざまな活動をしていて、関心も異なれば活躍の度合いも異なりますが、それでも交流が続いているのは、この会が一つの拠り所になつていることの表れなのかなど思っています（当会独特の緩さと真剣さがほどよく混在しているのが、長く続いた秘訣なのかもしれません）。

映像メディアのあり方にしても政治・社会問題にしても、世の中は混迷を極めています。このような時代だからこそ、さまざまな人の生き方や価値観に触れられる地元のコミュニケーションを今後も大切にし、より多くの人と対話と交流の機会を作っていけたらと思っています。

2025年7月吉日



みやぎシネマクラドルとは

「目次」	
10周年を迎えて	2
みやぎシネマクラドルとは	5
会の概要	6
主な活動	7
震災10年特別上映企画「10年後のまなざし」	8
これまでの活動歴	10
映像サロン採録	13
会員寄稿文「わたしにとってのドキュメンタリー」	27
関係者寄稿文	47
自主上映作品データベース	51

みやぎシネマクラドルは、宮城県を主な拠点に、映像を通して作り手と市民が繋がり支え合うためのコミュニティです。作品を鑑賞しながら語り合う「映像サロン」等を開催しています。地元になんな作り手がいてどんな活動をしているのか興味はありませんか？
どなたでもお気軽にご参加ください。

ブログQRコード



日々の活動を掲載しています





会の概要

2015年4月の立ち上げ以来、さまざまな立場の人が参加しているみやぎシネマクラドル。その立ち上げの背景には、地元で映画を制作している作り手がお互いの存在を知ること、支え合い切磋琢磨できる環境を宮城に作ることができないかという思いがありました。そこには、震災後、被災地に根を張り表現活動をしてきた人たちが、やがて繋がるべくして繋がっていった当時の状況も関係しています。

立ち上げ以来のメンバーには、ドキュメンタリーを中心に、劇場公開や映画祭での受賞の経験のある映画監督、テレビで実績のあるディレクターなど、映像の世界で活躍する作り手たちが参加しています。活動を続ける中で、アニメーション作家や作曲家など、メンバーも多彩になっていきました。

当会では、そうして活動する作り手たちと、その志や活動を理解し、応援してくれる市民が交流しながら、映像を通して人の生き方や社会について、そして表現のあり方について考えるための場を作っています。同時に、人と人が繋がり支え合うためのコミュニティとしても機能しています。

主な活動

当会の活動の中で主軸となっているものが、せんだいメディアテークの事業「メディアスタディーズ」の一環として、年に数回、不定期で開催している「映像サロン」というイベントです。

映像サロンの主な内容としては、①「会員作品の上映を通して、そこに描かれているテーマについて参加者が意見・感想を交わし、考えを深めるもの」と、②「会員の制作途上の作品について参加者が意見・感想を出し合い、制作者にフィードバックするもの」の2種類があります。①のほうは、参加者同士意見・感想を交わすことでさまざまな価値観を知る貴重な機会になり、②のほうは、普段孤独に映画を制作している作り手にとって、作品をより良くするための有益な視点が得られる貴重な機会になります。

このように、映像を通して参加者が対話し、人や社会や表現についてともに学び合うための開かれた場を作るのが映像サロンの目的です。

「cradle」(クレイドル)は邦訳すると「ゆりかご」という意味になります。このプロジェクトを通して地元の作り手の活動を広くたくさんの人に伝えつつ、同時に対話や交流を重ねることによって次世代の作り手や宮城の豊かな映像文化を育むことに貢献したい。これが私たちみやぎシネマクラドルの目指すところです。



みやぎシネマクラドル制作オムニバス映画

10年後のまなざし

監督：村上浩康、山田徹、我妻和樹、海子揮一／2021年／80分／ドキュメンタリー



震災10年特別上映企画 「10年後のまなざし」

当会の活動の中で大きな転機となったのが、2021年2月27日（土）にせんだいメディアテークのスタジオアターで開催した震災10年特別上映企画「10年後のまなざし」です。

この企画では、会員の有志4人が独自の視点から震災10年という時間に向き合い、本企画のために制作した20分ほどの短編ドキュメンタリーを1本のオムニバス映画『10年後のまなざし』として上映し、上映後に「震災から10年、わたしが感じていること・伝えたいこと」というトークセッションを行いました。

元々、「東日本大震災から10年を迎えるに当たり、地元宮城のみなさんとともに10年という時間を考えるための機会を作りたい」との思いから始まったこの企画ですが、当時はコロナ禍の真っ只中。東京では緊急事態宣言が発令され、東京に住んでいるメンバーは会場入りできなくなり、司会も4人の作り手のうち2人もリモートでの参加を余儀なくされました。また、会場では飛沫防止のため参加者の発話が禁止となり、意見や感想は紙に書いてもらうなど厳重な感染対策を取らざるを得なくなりました。

それでも、それぞれのスタッフがベストを尽くし、参加した方々には改めてみやぎシネマクラドルという会の役割について認知し

ていただき、当初の目的を果たしてとても有意義な会にすることができました。

その後、『10年後のまなざし』は同年10月に開催された第17回山形国際ドキュメンタリー映画祭（コロナ禍のためオンライン開催）の震災特集「ともにあるCinema with Us」で上映され、その後もいくつかの団体に自主上映会を開いていただきました。

『10年後のまなざし』

みやぎシネマクラドル制作／2021年／80分

村上浩康監督『冬歩き』、山田徹監督『あいまいな喪失』、我妻和樹監督『微力は無力ではない〜ある災害ボランティアの記録〜』、海子揮一監督『海と石灰〜仮設カフェをつくる〜』の4編からなるオムニバス映画。

自主上映会の問い合わせ：m.cinemacraddle@gmail.com

これまでの活動

※会のブログですべての記事を公開しています。

2015年 6月13日(土)

第1回映像サロン「私にとってのドキュメンタリー」

9月9日(水)

第2回映像サロン「日常」にドキュメンタリーはどう挑むか？」

※同日に山田徹監督新作鑑賞会&意見交換会を開催

12月6日(日)

第3回映像サロン「繋がりを見つける／輝きを捉える」

2016年 3月21日(月・祝)

第4回映像サロン「イメージの地層／被災地での記録と表現をめぐる」

4月14日(木)

六戸大裕監督新作鑑賞会&意見交換会

7月2日(土)

第5回映像サロン「光を求めて／『波伝谷に生きる人びと』で描けなかった個人の物語」

10月29日(土)

第6回映像サロン「秋の芸術祭!!／劇映画・ドキュメンタリー・アニメーション・科学映画

夢の競演」

12月23日(金・祝)

第7回映像サロン「まこっさんワールドへようこそ!／アニメと音楽のページェント」

2017年 3月27日(月)

第8回映像サロン「共同制作のあり方について／土地の人とともに暮らしの記憶を紡ぐこと」

2018年 1月27日(土)

佐藤真紀さんの映像作品についての意見交換会

9月1日(土)

第9回映像サロン「映画祭という試みの場／観る発見、つくる喜び、広がる世界」

2019年 2月16日(土)

第10回映像サロン「自主製作映画への欲求／テレビから個人の表現へ」

2020年 3月14日(土)

第11回映像サロン「あらゆる場所に映画は宿る／出会いが導くドキュメンタリー映画論」

8月29日(土)

第12回映像サロン「私が映像を作る理由／その人を知りたいと思う気持ちが映像になる」

11月21日(土)

第13回映像サロン「人をへ支える」ということ／今、震災1年後の映画から考える」

2021年 2月27日(土)

みやぎシネマクラドル震災10年特別上映企画「10年後のまなざし」

8月7日(土)

第14回映像サロン「ドキュメンタリーは生きている／エンドマークのその先に」

2022年 4月17日(日)

第15回映像サロン「映像表現の可能性を考える／山田徹監督新作ラフカットから」

7月31日(日)

第16回映像サロン「ナチュラル・ヒストリー・フィルムズ／生きる術の記録と世界の測り方」

2023年 3月19日(日)

第17回映像サロン「表現の豊かで幸福なあり方を考える／劇団・烏丸ストロークロックの

取り組みから」

8月6日(日)

第18回映像サロン「『あいまいな喪失』ラフカット上映会／原発事故が顕わにした、ある

家父長制家族の物語」

12月3日(日)

第19回映像サロン「ひとの死を見つめる／『あなたのおみとり』上映会」

2024年 5月12日(土)

第20回映像サロン「自分の生き様を貫く／あるロックミュージシャンを撮り続けて」

2025年 7月6日(日)

第21回映像サロン「そして生きていく／難病ALS当事者 さまざまな暮らしの工夫」



映像サロン 採録

- ブログ連載「ドキュメンタリー制作ノート」(2024年度企画)
- 第1回 企画・テーマ設定
 - 第2回 撮影交渉
 - 第3回 撮影準備
 - 第4回 撮影
 - 第5回 編集
 - 第6回 試写(対象への確認を含む)
 - 第7回 発表(自主上映会・劇場公開を含む)
 - 第8回 完成後の対象との関係
 - 第9回 失敗談
 - 第10回 フリーテーマ

これは、会員の山田徹さんの制作途中の長編映画をより良くするために、2023年8月6日に開催した「第18回映像サロン『あいまいな喪失』ラフカット上映会」原発事故が題材にした、ある家父長制家族の物語」のディスカッションの採録です。



〈はじめに〉

発表者の山田徹さんは震災後の福島をフィールドに映画制作をしている。2015年9月には、原発事故に翻弄される漁業者たちの苦悩を描いた長編第1作『新地町の漁師たち』のラフカットをクラウド上で上映し、その後ブラッシュアップして劇場公開を実現した。

長編2作目となる『あいまいな喪失』では、原発事故により浪江町を追われることになったある高齢家族の避難生活を追っている。老いていく自分を惨めと卑下する99歳のAさん。母を想いながらも介護を嫌い、仕事や家を失った虚しさから脱せずにいる息子のBさん。そんな親子を懸命に支えながら、「嫁」の勤めから解放された自由な人生を夢見るCさん。

山田さんのカメラは、今なお災禍にある3人の関係性と日常を淡々と記録している。そして2023年8月時点で編集の佳境にあり、映像サロンでの意見交換を希望することとなった。

本ディスカッション採録では、撮影対象のプライバシーに配慮し、Aさんを「おばあさん」、Bさんを「お父さん」、Cさんを「お母さん」と記述することにした。また、ラフカットとはいえ、上映はご家族の許可を得て行った。

我妻 会の代表を務めている我妻と申します。本日はよろしくお願いいたします。では山田さん、ご挨拶をお願いします。

山田 震災後の福島をフィールドに映画制作をしています。本日は2作目となる『あいまいな喪失』という長編ドキュメンタリー映画のラフカットを上映します。

本作は原発事故により避難生活が続ける浪江町出身の高齢者家族を追った作品です。撮影は2018年夏から2020年末にかけて行い、2022年の完成を目指して編集を続けてきました。ただ、ひとりでの編集作業に行き詰まり、苦戦しています。

今回の映像サロンでは、編集中のラフカットについて皆さんのご意見を伺い、それを制作に活かせればと思っています。編集に関係ない感想や意見も歓迎です。どんな視点でご覧になったのかを知り、映画づくりに大いに役立ちます。よろしくお願いします。

(※映画上映)

我妻 先ほど山田さんからもありましたが、映画をご覧になったの感想や、テーマに関連して考えたことなど、何でもお聞かせください。編集の意図が伝わりにくかった部分

※発言者の我妻、山田、猪俣、佐藤、海子、村上、土屋、岩松、鄭はみやぎシネマクラウド会員。



我妻和樹代表の開会挨拶

発表者の山田徹さん

や、こうしたら良くなるのではというアドバイスもぜひお願いします。

猪俣 感想を話します。まず一つ目は、今回のテーマに「家父長制」とありますが、お母さんが一生懸命おばあさんのお世話をしている、お父さんがあまり関わっていない様子を見て、そこを指しているのかなと思いました。実際にその意味で「家父長制」という言葉を使っているのか、気になりました。

もう一つ注目したのは、認知症の方への接し方や、表情・行動の細やかな変化です。もちろん、家父長制や原発の問題も大きなテーマだと思いますが、私にとって一番印象に残ったのは、おばあさんの姿でした。

山田 「家父長制」は思い切って付けたところがあります。僕は東京育ちなので、撮影を通してのご家族は初めて見るタイプだと感じました。父親が絶対的存在という家庭で、ここまで典型的なのは初めてです。

お父さんやお母さんが「男はこうあるべき」「嫁いだ妻はこうあるべき」といったしがらみに縛られて葛藤している様子を見て、テーマに据えようと思ったんです。ただ、それを主軸に編集しているわけではありません。僕が一番大切にしたいのは、登場人物が「自分らしくどう生きたいか」



という点です。「ありのままの自分」というのを打ち出した
 と思っています。

猪股 それを聞いて、私自身、家族と離れてきているところ
 もあって、家族との関係を思いながら観ていました。

また、私は最近まで仙台市議会選挙で多くの人と接して
 いたのですが、外で会うお父さんたちとか、それこそ普段
 はゴルフをやっている人とかいっぱいいるんです。その陰で
 は、奥さんが姑の介護を含めて家事全般を担い、夫をうま

くないながら生活しているんだろうなと思いました。

個人的な話になりますが、私の得票が増えたのは、そう
 した家庭を支える女性たちの「変えてほしい」という思い
 が、私に集まってきたからかもしれないと感じました。

山田 10年間の取材で疑問に思ったことの一つが、福島
 の小学校の入学式などで来賓がほとんど男性ばかりだとい
 う点です。

ある人が「原発事故は女性議員がいたら防げたかもしれ
 ない」と話していたのを思い出します。女性は男性よりも
 子どもの将来を考え、原子力のリスクにも敏感だったかも
 しれない。女性議員がいれば、違う選択があったかもしれ
 ないと。その言葉が印象に残っています。

佐藤 私は、この映画のYahoo!ニュースで公開されたバー
 ジョンや、クラウドで制作した震災10年のオムニバスの20
 分バージョンも観ています。好きなシーンがたくさんあつ
 て、おばあさんが横になってテレビを観てるシーンとか
 あれはもう言葉も何もないけど、画だけで感じるものが
 あって、「ああ、これが映像なんだな」とすごく思いました。

それで、お風呂場のシーンで、母親のことをいろいろやつ
 てくれている奥さんに背を向けて、絶対に何も言葉を発し
 ないお父さんのシーンがありましたよね。そこに、お父さ

んとおばあさんの関係性がすごく出てると思いました。お
 父さんに、母親にどう接すればいいのかわからないってい
 う、感情のせめぎあいを強く感じるんですね。

実は私も義理の母が認知症で7年介護しました。どんど
 ん分からなくなっていく母親に対して、うちの主人はあま
 り直視できなかった。やっぱり男の人は難しいのかもしれ
 ない。だから私が介護してたんです。

それなのに、亡くなってからは旦那のほうが仏壇にお水
 やご飯をあげたり、一生懸命いろいろやるんですよ。「いや、
 生きてるうちにやってよ」って、私は怒って言ってたんで
 すけど。そういうところが映画と重なって見えました。

私はこの映像がすごく好きなので、山田監督にはぜひ頑
 張ってほしいです。

海子 先ほど山田さんが話していましたが、私の住んでい
 る町にも女性議員が全くなくて、同じだなと感じました。
 そんな中で、自分は移住してきた人間として、女性の立ち
 位置というか、お嫁さんとして他所から来た側にシンパ
 シーがあります。

今回映画を観て思ったのは、「嫁に行く」という点で、お
 ばあさんとお母さんには共通点があるのでは、ということ
 です。どういことかという点、映画では震災によって「家



の喪失」が起きていますが、かつての女性にとっては、震
 災に関係なく「家に入る」こと自体が生家・実家を捨てる、
 「家を失う」ことでもあるわけです。つまり帰る場所が無い
 そこに、今も続く女性の立ち位置が重なって見えたのだと
 思います。

それに比べると、お父さんはとてもナイーブで、失うこ
 とや母親の死を受け入れることに、なかなか向き合えない

でいる。

私は普段から建築の仕事をしていて「家」に関わる人が多いのですが、震災後の一時期、各地で住宅の相談員をしていた時期があります。その家を壊すかどうか、を持ち主から聞いてアドバイスをするという仕事でした。

そのとき現地で話をするのはほとんど男性でした。女性ももう……。浸水してしまったところに対して悩むっていうのは、男性しかいなかったりする。男性の方が「家」というものと自分のアイデンティティが強く結びついているからではないかという気がします。

映像についてですが、家族の関係性を描く室内のシーンが続いて、正直少し単調に感じる部分もありました。それは風景や原発事故で崩壊した現場の映像、引きの画があまりなかったからではと。もっと遠景の中で状況や場所の説明がほしいと思いました。

山田 今回は言葉が多めですが、登場人物の感性をもう少し、言葉ではなく風景や映像で伝えたいとは思っています。外の環境音なども活かしたいのですが、今回はそこまで間に合いませんでした。

海子 やっぱり風の音があるといいですね。被災地では建物が壊されて、家がなくなり、風の通りがよくなっている

ので。

村上 この作品って家族の日常を追ってるようで、実はあのご家族にとっては日常じゃない。自分たちが住んでいた場所を追われて、仮住まいに暮らしている非日常なんですよ。さらにその非日常や現実の喪失感を複雑に強調しているのが、認知症のおばあさんの存在。

一見日常に見えて、実は

事。その中に山田さんのカメラが平然と入り、まるでカメラが無いかのように3人が自然に振舞っている。その中でものすごく濃密な人間関係や葛藤が撮れてるから、いろんなことが見えてくる。3人って社会の最小単位ですよ。ほぼ3人しか映っていないけど、あの中からのいろんなことが想起されて素晴らしいと思った。

ただ、海子さんも言ってたけど、やっぱり少し単調というか、この映画はどこに向かっているんだろうというの



それこそ曖昧に感じた。

で、この作品は、原発事故で住む場所を追われ、仮住まいを経て新居へ移るという、住まいの移り変わりの話だね？ それをもっと軸にできないかと思う。おばあさんが毎日毎日「明日引越すの？」って聞いている。その流れを作れば、もう少し話が整理されると思う。

だからやっぱり、引越した先の映像がなぜ無いのかと思う。ご家族がどんな家に入るのか、あの仏壇がどこに置

かれるのか、観ている側は知りたい。だから転居していくという主軸をもっと立てたほうがいいと思う。それをすごく感じた。

参加者A 私は人間の二面性がよく描かれている映像だと思いました。

ただ疑問に思ったのは、これは本当に家父長制家族の物語なのかということ。というのは、映像の中では子どもが描かれてい

いたため、強い父親像が浮かび上がリません。むしろ、過疎地の老々介護の物語という方が適切ではと感じました。ですから、老々介護を通じて浮かび上がる人間の二面性——自分の中の「私」と家族に見せる「私」の対比、ありのままの「私」で生きることの難しさなど——についての物語という方がしっくりくるし、その方が震災に関心のない人にも届く気がします。

『あいまいな喪失』というタイトルは、「そこにあるけれど帰れない」というニュアンスがあり、映画のテーマに合っていると思います。

山田 家父長制については、実は初期の頃は息子さん（3人とは別世帯）も撮っていたんです。息子さんもお父さんに対して子ども頃から反発できず、葛藤を抱えていた。それも家父長制に注目した理由の一つです。ただ次第に興味が、おばあさんとお父さんに移っていき、結果的にその視点が弱くなったのかもしれない。

我妻 僕が観て感じたのは、このご家族のあり方が山田さんには衝撃的だったかもしれませんが、自分のような田舎育ちの人間からすると、わりとよくある家だということです。いわゆる「伝統的な」家族ですね。もちろん、その感覚に慣れてはいけませんが。





原発事故がなければ目を向けられなかったかもしれない東北の家のあり方が、皮肉にも事故があったことで山田さんが撮ることになって、浮かび上がった側面はあると思います。ただ導入としては、「原発事故後の家族のあり方」という語り口の方が合っている気がします。家父長制という言葉は、女性の抑圧や性搾取など、もっと広い対象を含むと思うので。

村上 観る人はそれぞれ違うことを感じる。そこを紋切型

ただ、それも一概に言えないのは、おばあさん自身、日によって波があるとは思いますが、しっかりしているときもあり、お嫁さんの言動に対して後でちゃんとフォローしているんですね。そういう点で、少しハラハラするけれど問題にはならない絶妙なバランスが取れている気がします。

それから、おばあさんがすぐお茶目に、自分の状況を語るシーンがあるんですが、僕はそこがとても好きです。人って誰しも、誰かに必要とされることで生き甲斐を感じると思うし、その役割が失われていくことに喪失感を覚えると思うのですが、そのことを語るのが100歳のおばあさんって、かなり貴重だと思います。世に出ている映画で、100歳の人の本音を聞ける作品って、なかなかないと思うので。その点でも、山田さんならではの映像だと感じました。

土屋 好きな場面の話を今の文脈の中でさせてください。おばあさんが「引越しいつ？」って何度も聞く場面、私は好きです。ジェスチャーしながら話す姿、もつともつと見たかった。テレビを観てて閉められて、「閉めなくていいじゃん」って言うところも好きで、ああ、私、おばあさんのファンなんだなって気づきました。

で「家父長制」って切り取るのが果たしていいことなのかなっている。そうすると映画の解釈の豊かさが失われてしまう気がする。

だからもつとニュートラルに、誰かが良い悪いという描き方は避けたほうがいい。俺は、あの3人それぞれが魅力的に描かれていて、それだけで十分引き込まれたよ。

我妻 村上さんが仰る通り、山田さんが現場のやり取りを丁寧を追っているの、肌触りというか、登場人物たちの人間味がとても伝わる映像だと思いました。確かに単調ではありますが、僕自身はあまり気にならず、じっくり感じ取ることができました。

一方で少し気になったのが、お母さんの、おばあさんに対する言動です。嫁としての距離感を大切にしつつ、言うべきことは言っていて、もちろん、言い過ぎないようにしているのも分かるのですが、見ていて少しハラハラする場面もあります。

それはなぜかという、基本的に認知症の方の発言は否定せず受け入れるべきという考えがあつて、専門職やそういう勉強をした人なら分かると思うんですが、家族だからこそ、あるいは知識がないがゆえに、悪気がなくても虐待につながってしまうことがあるからです。



84歳の母が北海道で一人暮らしをして7年になります。ときどき生活支援が必要になります。あるとき母が「でも私にも尊厳がある」「あなただって30年後にはこうなるんだから、勉強になるでしょ？」と語るのを聞いて、「そうだなあ」と思っただけです。そんな中、だんだんと「前も言ったでしょ」と言わずに済むようになりました。今は昔の写真を見せて「こんなことあつたね」と話したり、「これから面白いことしよう」と声をかけたり、いろんな関心に向けるようにしています。母から学ぶことが多いです。

この話をしたのは、「認知症の人」といった切り方が、人としての出会いを妨げてしまうから。私は映画のおばあさんと、人として出たいと思っています。だから観る人がおばあさんを大切に思えるような言葉がもっとあれば、カットしたくないです。

そういう中で、お父さん

が母親にイライラするのもすぐ分かるし、それも自然だなと思います。でも3人だけだと社会が狭くなって、裏側が見えにくい。だから、たとえば、お父さんを息子さんがどう見てるか、孫がおばあさんをどう思ってるか、他の人が語る場面があると、3人の関係がより伝わるのかなと。それはテロップでも良いかもしれません。そうすれば「老い」がもっと自分事になる気がします。

テーマですが、「家父長制」という言葉を使うと期待が強くなってしまう、逆に期待外れになる気がします。使うなら「封建制」や「昔ながらの」くらいがよさそうです。

どうなるかとても楽しみにしています。ありがとうございます。

岩松 山田さんはたぶん家族の映画を作ったかと思うんですが、山田さんがさっき仰ったような背景って、観てる側には分からないんですよね。今映ってる現実だけを見ると、最初に撮りたいと思ったことと、だんだん変わってきてる気がするんです。それが、いい意味での不安というより、曖昧に感じます。

やっぱり映画として一番の魅力はおばあさんなわけですよね？となると、本来はおばあさんを中心に撮るはずだけど、話の筋はお父さんとお母さんの話だったりして、視点

が定まってる感じがします。だから、観てる側が不安になるんです。

山田 僕も編集しながら感じた部分です。撮影初期のシーンが多い前半部分、とくに浪江の家を解体するまでの話では、自分の中でも何を撮ろうとしているのか、迷いが出てるんですよ。

後半はよりおばあさんを軸にして、お父さんとお母さんの葛藤とか、3人の関係性を撮りたいという気持ちになっていったので、何を撮るべきかが定まっていたところがあります。

たしかに迷いがあるけど、じゃあ僕の迷いを映画で表現するかって言ったら、それは違ってしまうのは、やっぱり作品

岩松 観てる側が迷うと感じてしまうのは、やっぱり作品としてはいけない気がする。

村上 もしこれが劇映画だったら、たぶんおばあさんの視点で描かれるんだよ。そうするとものすごく伝わるものに



なる。山田くんがそういうふう撮ってるかは分からないけど。

さらに、おばあさんにしてみれば震災ですら夢か現実か分からなくなってるわけだから、多重に喪失感があるわけ。だから欲を言えば、おばあさんの視点で見る映画だったらじっくり来るよね。

あともおばあさんのユーモアを入れたいよね。面白いし。もっと入れたほうがいいよ。

佐藤 私もおばあさん、すごくいいと思う。

参加者B 私はテレビカメラマンです。とても複雑に読み取れる作品だと思います。

今の話で言うと、やはりおばあさんに強く惹かれました。おばあさんを見ていけば、大熊町や浪江町の100年が見えてくると感じ、テレビならすぐにそっちに進みます。

この映画を観て考えさせられたのは、絶対的に歪な状況です。今までありえなかった世界が空間として現れ、その上に登場人物たちがいると理解すると、辛くなります。でも、この歪さを誰が作ったのか、なぜこうなったのかを考えると、テレビ屋はすぐ「原因は原発だ」と言いますが、それも何か違う気がします。それは山田さん自身が一番現場で感じたことだろうから、こういう作りになったのだと思ういました。

もしテレビで分かりやすく作るなら、放射線量や帰還困難区域、避難先のいわきの情報などを、位置関係や風景とともに差別化し、後半でおばあさんの追い立ちや故郷の意味を描き、亡くなるという流れになるでしょう。

ただ、テレビ的な作りがこの作品の魅力になるかは分かりません。お母さんとおばあさんが日付をめくってやりとりするシーンなどは本当に痛く、観てるとどんどん辛くなります。そのやりとりが真新しい復興住宅の中で起きているから、なおさら痛々しいのです。

もし震災がなく、浪江や大熊の日本家屋の広い、ボロい空間で同じことが起きていたら、もっと平和に見えたかもしれません。でも実際には「ここはどこなんだろう？」という感じの復興住宅で、ある種の惨劇が起きているわけで





す。そうした歪さをどう映画として伝えるか、どう効果的に見せられるのかをずっと考えていました。だから、最後に「これは実は福島の物語だ」と種明かしの出すのが良いのか、それとも、最初の方で示して観る人を惹きつけた方がいいのか、本当に悩ましいです。

また、カメラマン的に言うと、人形を修復するシーンが良かったです。みんな、元に戻したいのでしょね。三者三様。でもそれが元に戻らない。その、直しても埋められないもどかしさがもって見えたら、さらに強い作品になると思います。

鄙（ひび）私は家庭という非常にプライベートな空間を映しながら、同時に「原発」という大きな社会的課題や、公共性の強い問題を描いている点に、とても強さを感じました。原発という巨大な問題が背景として存在しつつ、その前景では家族のケンカや沈黙といった出来事が、非常に鮮明に映

像化されている。そこにこの作品の力を感じます。

そうした意味で、先ほど議論に出た「家父長制」という括りや、音楽・テロップといった映画技法を用いて、説明的にわかりやすくする必要があるのか、疑問に思いました。説明がなくても、「家父長制」やその他の広い社会問題は、ひとつの家族を通じて自然と伝わってきます。何かが善い、悪いという単純な話ではなく、社会そのものが見えない力として個人に影響を与え、それぞれがその枠の中でやむをえず家族を形成している。そして、その中でお互いに交流が難しくなっていく。そうした、ある種非常に悲劇的な関係性が、映像そのものによって自明なかたちで表現されていると感じました。

だからこそ、そういった重層的なテーマは、映像自体に語らせるのが一番良いのではないかと思います。その意味で、音楽の使い方については少し疑問を持ちました。後半では沈黙を通して物語が語られていた分、音楽によって情動的な効果を無理に加えないほうが良かったのではないかと思います。

参加者C 僕は福島の浜通り出身ですが、これは僕には撮れない映像だと思いました。リベラルな家庭で育った山田さんだからこそ、撮れたんじゃないかと感じます。

それと、ある意味おばあさんが羨ましい。忘れてることと忘れていないことを行き来してる。辛いことって忘れたいけど、忘れられない。だから、いい時間をおばあさんは生きていたのではないかと思います。

あと、「あるがまま」を主題にする場合、どういう効果を生むのか分かりません。僕としては、人間関係でしかないと思う。その点で、山田さんの描きたいものと、この家庭の実際にズレがある気がする。逆にそのズレがいい効果を生んでいるのかは分からないけれど、そこをどう捉えるかが、この映画の主題になると思います。

山田 「あるがまま」にこだわるのには理由があります。浪江の家が解体された後、お母さんが「ありがとうございました」と書かれた手紙をくれました。そこには原発事故で故郷のしがらみから解放された気持ちも書かれていて、何も持たない自分、「ありのままの私しか残っていなかった」と気付き、「それを幸せだと思いました」と綴られていたんです。

その、浪江時代の家の苦勞から解放された人間としての自分、飾りのない「ありのままの私」という言葉に惹かれました。彼女はそれに気付けたから前向きに生きられるし、お父さんやおばあさんのように過去を背負わずに生きてい



る。だから人間関係を見つめるというのは、ちょっと違うように思ったんですね。

まあでも、僕が考える「ありのまま」とは違うのかもしれない。ただ、原発事故を通して、さまざまなものを失った後に「残った私は何？」と葛藤している人は少なくないと思います。それを今回の映画で描きたいかといえば、描きたいですけど、それをこのご家族に押し付けていいのか

…ちよつと分からないですね。

参加者C だからたぶん、そこがなんか、作家のエゴというか。

村上 まあ、ここにも映画を作ってる人が何人かいるけど、俺もさ、自分が「作りたい」と思うから作るんだよね。でもドキュメンタリーって現実を題材にしてるから、当然だけ自分の思い通りには運ばないじゃない。だから俺の信条を言わせてもらおうと、「自分が作りたい・描きたい」よりも、「この映画がどういうふうに生まれたがつているか」つていう、そこに耳を傾けることが一番大事だと思う。

映画監督つてさ、「自分の作りたい映画を作る人」じゃないと思う。映画のために尽くせる人が、映画監督だと思う。我妻 はい、時間になりましたので、この辺で終わりたいと思います。みなさん、ありがとうございます。山田さん、最後に一言ありますか？

山田 今日は暑い中来てくださって、ありがとうございます。した。なかなか自分では向き合えていなかった部分があったんですが、意見をいただいて非常に有意義でした。この映画の「何が大事なのか」ということが、なんとなく見えてきた気がします。

…まあ、ちよつと、もう一回編集しますので、また観て

いただければと思います。それが完成版なのか、中間報告なのか分からないですけど。今後ともよろしく願います。

我妻 完成したら、たくさん上映会が開かれるような作品になるといいなと思います。山田さん、今日は本当にお疲れさまでした。(拍手)



会員寄稿文 「わたしにとっての ドキュメンタリー」

みやぎシネマクラドルに所属する会員のことを知っていただくために、ブログでリレー形式で公開してきた寄稿文「わたしにとってのドキュメンタリー」。ここでは、14名の会員が書いた文章を公開順に掲載します。

砂子啓子

「みやぎシネマクラドル」が発足した2015年当時、私は幼児・小児の子育てを中心に生活する主婦であり、また、2011年3月の震災をうけて自身が立ち上げた任意団体を通じ様々な応援活動を行っていました。

家庭や社会の中で主婦の関わる事柄は多岐にわたり、膨大です。一日のうちに何をどのくらいしているのか振り返る時間もなくていく日々。

初年度の6月にみやぎシネマクラドルの「第1回映像サロン」が開催され、我妻和樹さんの『波伝谷に生きる人びと』の短編バージョン、小原啓さんによるTV作品『あの日から…』を視聴させて頂きました。

―ドキュメンタリーを観る時間がない―

忙しいと言ってこれまで観る機会を作ってきませんでした。作品を撮影・編集した人と一緒に視聴をし、観た人たちが思い思いの感想を話す。しっかりと時間を取って、丁寧

に会は進められます。

隣に制作者がいる状況で観るというのは、格別な機会です。参加された方々の発言からは、自分には無かった考え方、気づきがありました。

それからこの映像サロンは19回の会を重ね、来年には発足から10年となります。

何も実態のなかった所から人の集う場を生み出し、自由に思いを伝え合える機会となり、出会いや繋がりをつくっている。それを今まで継続していることは本当に凄いことだなあ…と、改めて感じています。

また、作家の皆さんはお一人一人の背景も興味深く、作品の中にその方の人柄や生き方、人との接し方が映し出されていると感じます。そういった理由からも作品に愛着が湧いて応援したくなります。

住まいも年齢も置かれている立場も性格も違う、一人一人がクラドルの取り組みにその時々に参加し関わってくださったことが今に繋がっているのだと思います。

時代の変化が急速な今だからこそ、今、そこにある事を記録するドキュメンタリーの価値は深く、大きいです。

この、ゆるやかでまじめで真剣且つ、楽しい場にこれからも参加をさせて頂きたいと思っています。

皆さんも是非！映像サロンにご参加下さい！

砂子啓子（すなこ・けいこ）

佐賀県出身。出産前後の子育て時期より宮城県仙台市に12年間在住。2016年に東京へ転居。2011年3月、被災地と支援者を結ぶ任意団体「iーくさのねプロジェクト」を立ち上げる。2018年、防災士の資格を取得。子育て、家事、防災、仕事、地域活動。興味関心事をミックスし、複合的視野を持って生活している。特技（趣味？）は子どもたちのために始めた剣道で、地域の剣士と共に稽古中。

わたしにとってのドキュメンタリー vol. 2

2024年3月11日公開

猪股 由美

映像作品の作り手／鑑賞者の区分でいうと、一鑑賞者で一会員の猪股由美です。2018年9月の、みやぎシネマクラドル第9回映像サロン「映画祭という試みの場」を観る発見、つくる喜び、広がる世界」に、「吉岡宿にしぴりかの映画祭」の実行委員の仲間たちと話題提供者として参加し、クラドルに入会しました。

「にしぴりか」という場所は宮城県大和町にあり、障害のある人たちのアトリエやグループホームや常設美術館や喫

茶店があるところです。そこで2016年に「見渡せば、知らないことばかりのこの世界。まずはゆっくり、近付いてみよう」というテーマで始まったのが「吉岡宿にしぴりかの映画祭」です。ドキュメンタリー作品がメインで、立ち上げの際はクラドル代表の我妻和樹さんが奔走していました。その映画祭の始まりをSNSで知った私は「違いがあっても共に生きること」を大切にしているように感じ、こどもを連れて実行委員会に飛び込みました。それから7年、昨年だけは開催できなかったのですが、今年の11/30/12/1に開催するのが第7回になります。

もともと私の関心ごとは人文や社会で、趣味は市民活動です。そういった関心から、過去には社会問題をテーマにしたドキュメンタリー映画の自主上映会を運営することもありました。しかし、映画自体には詳しくなく、ドキュメンタリー映画をたくさん鑑賞してきたわけでもなく、観られるときに観ている、浅い関わりです。特定の社会問題に関心を持ってもらう／自分自身も理解を深める／映画を観て感想を話し合う場を共有するための媒体としてドキュメンタリー映画に接してきたと思います。

でも、映画祭実行委員を続けてきたことや、クラドルの映像サロンにもちょこちょこ参加するようになって、ド

キュメンタリーを観る目が少しずつですが確実に変わってきたと自覚しています。

映画配信サービスで「ドキュメンタリー」のカテゴリ検索をすると、大自然や生き物、有名人や場所を撮った作品が多くみられますが、私が語りたいドキュメンタリーは少し違います。まだ知らない「人のいとなみ」に密着した作品。私も仕事柄「人のいとなみ」に近づいてお話を聞くことを大切にしていますが、ドキュメンタリーの場合、もっとふつうでない距離感で、さまざまな角度から、被写体になっている人と近づいていきます。プライベート空間でしょっちゅうカメラを回されて公開されるのは、被写体にとって気持ちのいいものではないのとは思いますが、そこを許容される関係性を作り、そばにいて映し、技巧を駆使して作品を仕上げています。映画という総合芸術を、ドキュメンタリー制作者は（きつと）低予算で作り、それを公開してお客さんに鑑賞してもらう。映画制作に関わる一連においてきつと苦勞も多いだろうと思います。でも作らねばならぬ何かがあるのだろうと、それを受け取ることができたらと思つて、いまでもドキュメンタリーを観ています。

捉える、そんな考え自体が横暴であり不可能なことです。

かといって漫然とその人を見ることもしません。自分なりの角度でその人を捉え、さらにその人が置かれている状況が、その人以外の世界（つまりは社会）とどう結びついているかを絶えず俯瞰しながら撮影を進めます。

すると思ひもしないことが見えてきます。被写体である本人すらも気づいていない、その存在自体が象徴的に醸し出す、より大きく普遍的な問題です。ドキュメンタリーがオリジナルの視点を得て、テーマというものを宿すとしたら、まさにこの瞬間にこそあるのです。

このことを発見（あるいは発掘と言つてもいいかもしれません）出来るのは、第三者である撮影者だけだと思ひます。すなわちここにドキュメンタリーの存在意義があるのではないでしょう。

本人すら気づいていない、その人と社会との結びつき。そこには必ずある種の批評性が存在し、そこから普遍性を導き出し、その人が抱える問題を観客にも通ずる問題として再認識してもらう。これこそが私が目指すドキュメンタリーです。

他人の人生にお邪魔して、その人生を利用して作品を創り、その人と何の関わりもない観客に見てもらう。こんな

わたしにとってのドキュメンタリー vol. 3

2024年3月30日公開

村上浩康

ドキュメンタリー作品を作るうえで私が最も大切に行っているのは、被写体となる人の魅力を第一に描くことです。ドキュメンタリーという、テーマとかメッセージとか概念・観念が先走りがちですが、私はそういうものを優先的に主張しようとは思いません。

被写体となるのは、基本的に自分が興味を惹かれた人ですから、なぜその人に関心を持ったのかを作品に込めたいと思つています。さらに撮影を通じて、その人の知らない部分や新たに発見した側面など、製作者の認識の変化や被写体との距離の変化も、作品に取り入れたいと考えています。

むろん製作者が見ているのは、その人の一面でしかなく、その人の全てを描くことなど出来ません。ある人の全てを

迷惑でお節介なことが許されるのは、ドキュメンタリーが見知らぬ人どうしの出会いを可能にするからだと思ひます。

「あなたのことは、わたしのこと」

誰かと誰かの間に立ち、このような視点を提示することが私にとってのドキュメンタリー製作です。そのためには単なる記録にとどまらない、作品づくりの上での様々な創意工夫が必要になるのですが、それはまた別の機会にでも述べさせていただきます。

村上浩康（むらかみ・ひろやす）

映画監督。宮城県仙台市出身。

作品『流ながれ』『小さな学校』『無名碑 MONUMENT』『東京干潟』『蟹の惑星』『藤野村歌舞伎』『冬歩き』（オムニバス作品）『10年後のまなざし』中の一編）『たまねこ、たまびと』

上記の作品群でキネマ旬報文化映画ベストテン入選、文部科学大臣賞、文化庁優秀映画賞、新藤兼人賞金賞などを受賞。

最新作は『あなたのおひとり』（2024年）。

小原啓

私を除くシネマクラドルの映像作家は皆、映画という形でドキュメンタリーと関わっていますが、私はテレビという媒体でそれと向き合っていました。

テレビ業界に身を置いて30年。振り返れば自然や歴史、人、社会問題など、我ながら節操がないと呆れるほど様々なジャンル、テーマのドキュメンタリーを手掛けてきました。あるときは太平洋戦争時、激戦の島から持ち帰った日本兵の手紙を親族に返したいという元・米軍兵に会うため渡米したり、またあるときは遠洋漁業の最前線を撮るため単身で半年間、遠洋マグロ船に乗り込むなど、作品の出来不出来は別として間口の広さだけは誰にも負けない自負があります。

ではドキュメンタリーを作るにあたって自らを動かす原動力は何か。おそらく生来持ち合わせた野次馬根性が影響しているのですが、ディレクターとして自ら「その場に立ちそこで起きている事象や人間に生（なま）で向き合いたい」という強烈な欲求です。それは時に「おまえのエゴだ！」と言われるかもしれませんが（実際、そう揶揄さ

りも「現場に立つ」方が圧倒的に面白いからです。

小原啓（おはら・さとる）

高知県出身。94年よりテレビディレクターとして番組制作に携わる。

主なドキュメンタリー作品に『戦場に残された手紙　よみがえる戦争の記憶』（2008年）『津波を撮ったカメラマン』（ニューヨークフェスティバル 国連賞銅賞／2011年）『県境が分けた　置き去りにされた宮城県丸森町筆甫』（ギャラクシー奨励賞／2015年）など。

2018年退職。現在、フリーランスとして映像制作に携わる。

わたしにとってのドキュメンタリー vol. 5

佐藤真紀

2024年5月7日公開

独身の頃、映画音楽を作ってみたなあと思っていました。でも近くに映画を作っている人がいなくて、自分で映画を作れば、音楽をつける事ができるんじゃないかと思うようになりました。その後、結婚、出産、子育て、介護と

れたことも…）自分にとってドキュメンタリー制作の出发点は常にそうでした。「誰かに伝えたい」のずっと手前にあるのが「その場に立ちたい」という欲求。そしてその時、自分はどう変化するかという興味です。想像を超える現実を前にうろたえるのか、心が震え涙があふれるのか。時には短絡的で浅い自分の考えを恥じることもありました。

前述した元・米兵に会ったときのことです。その老人は予想通り聡明で人間味に溢れる人物でした。インタビュアが終わり雑談をしている時、私はふとこんな質問をしました。「アメリカによる原爆投下をどう思いますか？」すると彼はこう言ったのです。「戦争を終結させるために原爆投下は必要だったと思う」。この予想もしなかった答えに私は動揺し言葉を失いました。今なら「人は一様ではない、それが人間だ」と思えます。そんな変化をもたらしたのは様々、なしがらみの中のサラリーマンとしての経験ではなく、自分にとってはドキュメンタリーだったと思います。

テレビ業界におけるドキュメンタリーの存在感は、かなり前から風前の灯火状態が続いています。そうした中、自分のテーマはこの先、どのようにしてドキュメンタリーと関わっていくのか…ということ。

なぜなら自分にとってのドキュメンタリーは「見る」よ

自分の夢など考える暇など無く、ただただ時間が過ぎていました。

そして、生活が一段落した頃、友人から「昔、映画作りたいて言ってたよね。明日、イベントがあるから行かない？」と誘われて行ったのが、みやぎシネマクラドルでした。

そのときに観たのは穴戸大裕監督の『百葉の栞（ひゃくようのしおり）園の日』でした。テレビで観るドキュメンタリーとは違い、そこで生活をしている人々に寄り添うような、自分がそこに居合わせているような、ゆっくりと確かな営みが写されていました。

このみやぎシネマクラドルと出会い、次に代表の我妻和樹さんや穴戸大裕さんが関わっていた「吉岡宿にしばらくの映画祭」と出会うことになります。ここで穴戸さんが映像制作ワークショップをやるといので、映画を作ったかった私はすぐに参加をして映画祭の実行委員にもなりました。この映画祭に関わることで、たくさんの方と知り合いました。この映画祭にも出会うことになったのです。

私にとってのドキュメンタリーは圧倒的に「人」の魅力です。人にしか興味が無いと言ってもいいくらいです。その人の生き方、ものの考え方、表情から窺い知るその人そのものが映像となって現れてくるときに心が動くように思

鄭知硯

います。もちろん、フィクションの映画でもそういうことはありますが、ドキュメンタリーの方がダイレクトに感じるように思います。

ドキュメンタリー映画というと、問題意識を突き付けられたり、目を背けていることからの罪悪感だったり、観た後に心が重くなったり、など敬遠される方もいるかもしれません。でも、知らない事を知る喜び、驚き、悲しみ、痛み、などは観る人の世界を何倍にも広げる事ができる、そして鏡となつて、自分自身に還つていく、ドキュメンタリーにはそんな力があるように思います。もともとずっと、観てもらいたいです。

佐藤 真紀（さとう・まき）

主婦。宮城県仙台市出身。ピアノ講師を経て、農業サポーターとして働く（2024年まで）。

50歳から映像作りを始め、「吉岡宿にしりりかの映画祭」映像制作ワークショップにて、ショートムービー『マサさん』（2017）『光の時間』（2018）『朝採り枝豆』（2019）を制作、自身で音楽も担当。我妻和樹監督の『千古里の空とマドレーヌ』（2021）で音楽を担当。長編『ササキショイ チ ドキュメンタリーA面B面』を制作中。

学に合格した」と回答し、その答えに観客は安堵の表情を見せました。

映画手法や芸術実践に関する議論よりも、このやりとりが長い間私の心に残っています。これは、ドキュメンタリーが持つ、私自身以外の「誰か」への純粋な関心を喚起する力を示しているからだと思います。

映画研究者、Dirk Eitzen（ダーク・エイツェン）は2005年の論文で「ドキュメンタリーは私たちに不思議な感動を与える」（2005:191）と述べています。Eitzenによると「ドキュメンタリーの中で誰かが泣いているのを見たとき」、我々観客は、「それが（俳優ではなく）、本物の人である」（2005:195）とのことを、身体と感情のレベルで認知することができるのです。

Eitzenの啓発を受けて、私は自分のドキュメンタリー鑑賞を「他者との出会い」と考えるようになりました。映画館や他の観客と共有する上映空間で、私自身の身体的、感情的なレベルで、まったく異なる他者が経験した身振り、感情、記憶を受け止めながら、スクリーンに映る「誰か」と出会い続けます。

今日では、私たちの生活は新世代の技術、特にバーチャルリアリティに囲まれており、「私」が「他者」といかに出

2018年、仙台市中心部にある桜井薬局セントラルホールで、我妻和樹監督のドキュメンタリー映画『願いと揺らぎ』（2017年制作）を鑑賞しました。これまでナショナルジオグラフィックの映画や歴史人物のドキュメンタリーを数多く見てきた私ですが、この映画には何か特別なものがあると直感で感じ、強く惹かれました。

「特別な何か」とは何だろうか？この疑問を抱きながら、その後の数年間で私は、ドキュメンタリーを作る人たち、観る人たち、そしてドキュメンタリーに登場する人たちに実際に会うことで、私の中でこの問題に関する理解が少しずつ深まっていきました。

去年、「山形国際ドキュメンタリー映画祭2023」で、中国の映画作家章夢奇（ジャン・モンチー）監督の『自画像：47KM 2020』（2023年制作）を鑑賞しました。上映後の質疑応答では、映画観客から「映画の中の村での生活はどのようなものか？」「映画に登場した少女、方紅（ファン・ホン）のその後はどうなったのか？」といった質問が多数寄せられました。最後の質問に対して、監督は「方紅は大

会うかは常に熟考されるテーマだと思います。

そして、ドキュメンタリーのおかげで、私はより多くの人々と出会えるだけでなく、自分自身とも出会うことができるようになりました。

これがわたしにとってのドキュメンタリーの意味です。

【文献】

Eitzen, Dirk. 2005. "Documentary's Peculiar Appeals." Joseph D. Anderson and Barbara Fisher Anderson eds., *Moving image theory: ecological considerations*, Carbondale: Southern Illinois University Press, 2005, 183-99.

鄭知硯（こう・ちけん）

所属…東北大学国際文化研究科博士後期課程
専攻分野…映画学、ドキュメンタリー映画

我妻 和樹

僕がドキュメンタリーという表現手法に魅力と可能性を感じるのには大きく二つの理由があります。

まず一つは、映像記録そのものの力です。

例えば、何気ない日常や非日常の出来事、変わりゆく風景やそこにあった思い、大切な人の表情や声……。映像には、そこに確かに存在していたかけがえのない時間や生の輝きを、そのときの温度のままに半永久的に記録し、観る人の心の奥深くにある感情に直接働きかける力があります。ドキュメンタリーにおいて、この映像が持つ本来の力は何よりも重要な要素です。

そしてもう一つは、現実世界の想像を超える複雑さと、現実にかけている人の圧倒的な存在感を可視化する力です。

僕は、ドキュメンタリーにおいて必ずしも社会批判的なテーマ性が最重要事項とは思っていません。ドキュメンタリーの定義を「事実の断片を作り手の意図によって再構成した映像」とするならば、それによって生み出される作品は実に多様です。

しかし、知られざる現実や人の葛藤など、普段あまり目

を向けられることのないこの世界の繊細で複雑な側面を、ほかでもない作り手自身の身体を通じて可視化し、社会に問いかけることも、ドキュメンタリーの大きな役割です。そこに映り込む情報の豊かさは、劇映画ではとても再現できないものであり、それは昨今のAIでも生成できない独特の領域といえます。そしてここにドキュメンタリーの大きな可能性があります。

ただし、ドキュメンタリーの場合、自分の中に「撮りたい・描きたい・伝えたい」という強い動機があったとしても、それは撮影対象となる人の同意があつてはじめて成り立つことです。ドキュメンタリーが事実そのものではなく、作り手の表現物「創作物」「フィクション」とはいつても、それは対象の意思も人生も、作り手の都合で好き勝手にできない厳然たるものであるという大事な前提があるからです。

そのため、すべて作り手の望み通りとはいかなくても、表現が互いにより良く生きるための方法として活用されることが、ドキュメンタリーにとっては大事なことです。

このように、ドキュメンタリーは僕自身がこの世界や人とどう関わり、何を思ったかの記録ともいえます。ときには「自分が受けた衝撃や感動の10分の1も描けていない」と思うこともあります。

その一方で、現実との対話から生まれる新たな何かが、思いもよらぬ奇跡や幸福を呼び起こすこともある。それが僕にとってのドキュメンタリーです。

我妻 和樹（あがつま・かずき）

1985年宮城県白石市出身。主な作品に、宮城県南三陸町を舞台にした長編ドキュメンタリー映画『波伝谷に生きる人びと』（2014）『願いと揺らぎ』（2017）『千里の空とマドレーヌ』（2021）など。みやぎシネマクラドルでは2015年の立ち上げから代表を務め、震災10年を機に当会で制作したオムニバス映画『10年後のまなざし』（2021）にも参加。令和3年度宮城県芸術選奨新人賞（メディア芸術部門）受賞。

山田 徹

ぼくがドキュメンタリー映画の存在を知ったのは大学卒業後のことです。当時、メディア論を研究していたため、関連作品を映画館やレンタル店のDVDで観るようになり

ました。その中でも特に心に残ったのは、土本典昭監督の水俣シリーズです。患者さんに寄り添い、水俣病の真実を追求する監督の姿勢に胸を打たれました。ぼくにとって、ドキュメンタリーは世界の現実に近づくための重要な手段となりました。

さまざまなドキュメンタリーに触れるうちに、「観るだけでなく作ってみたい」という思いが強まりました。その結果、東京の映画美学校でドキュメンタリー制作を学び、縁あつて記録映画作家の羽田澄子監督とプロデューサーの工藤充さんがいる自由工房に勤務する機会に恵まれました。この会社は映画の製作だけでなく、上映や配給活動も手がけていました。羽田さんと工藤さんは、被写体やスタッフとの交友関係を大切にし、この会社でぼくはドキュメンタリーに対する姿勢や情熱、醍醐味を学びました。

2011年の東日本大震災は、ぼくにとって初めての監督作品を作るきっかけになりました。アルバイトで貯めた製作資金を頼りに、夜行バスで被災地に向かい、土地の人々との関係をゼロから築きながら、映画の物語となりそうな出来事を探し回り、時間をかけて撮影を重ねていきました。自主製作でしたが、映画は多くの人々に支えられ、劇場公開に至り、今も上映が続いています。現在は2作目に取り

組んでおり、完成が近づいています。

作家としての気づきは、ドキュメンタリーは単なる記録ではなく、再継承の営みであるということです。現実の出来事を素材にした物語を構成するのは、作家と被写体の相互作用によるものです。人であれ風景であれ、被写体は語り部として重要な役割を果たし、作家はその語りの中に潜む動機や意思、記憶や身振りにも触れながら物語を再構成します。この相互関係があってこそ、一つの現実世界、すなわちドキュメンタリーが完成します。

氾濫する情報、AI技術の進展や新しいサイバー空間の出現、分断や画一化が進む現代社会の中で、ドキュメンタリーはどのような役割を果たせるでしょうか。もしドキュメンタリーが世界の現実に近いための架け橋であるなら、作家が果たすべき役割は、その世界の片隅にいる他者に歩み寄り、そこから生まれる無数の物語と記憶を次世代に継承していくことだと考えています。

山田 徹（やまだ・とおる）

東京出身、自由学園卒、映像作家。記録映画作家の羽田澄子監督に師事。東日本震災後の福島をフィールドに映像制作を行なっている。過去作に映

んだ」という根拠のない自信が根深く残っており、震災から4年後、私は映画学科のある関東の大学に進学していました。映画で「故郷」や「震災」と向き合うことは容易ではありませんでしたが、負けず嫌いな性格が幸いし、在学中になんとか形にできたのがこの2作です。『春をかさねて』は、被災地の14歳の少女の葛藤を描いた、完全なるフィクションです。地元の方々を中心にキャスティングし、2019年3月の約10日間で撮影しました。本当はこの作品で制作を終える予定でしたが、卒業制作として30分の短編を作ることが必要で、「それなら『春をかさねて』と相補的な、双子のような映画を作ろう」と着手したのが『あなたの瞳に話せたら』です。ドキュメンタリーとはいっても、「被写体にそのままカメラを向けたくない、ありのままを映し出したくない」という私の強い意志がありました。震災後、取材される側として撮影者に自分自身を受け渡す際の、精神的な負担を私自身がよく感じていたからです。そのため、映画の語りに「手紙」を用いたり、明確なカット割の中で被写体に芝居をしてもらったりと、フィクショナルな要素を取り入れた作品になっています。『春をかさねて』と続けて観ることで、フィクションとドキュメンタリーが溶け合い、大川という場所をより身近に感じられるのではない

画『新地町の漁師たち』（第3回グリーンイメージ国際環境映像祭・大賞）。現在、映画『あいまいな喪失』（2025年公開予定）を制作中。

わたしにとってのドキュメンタリー vol. 9

2024年12月5日公開

佐藤そのみ

故郷・宮城県石巻市大川地区を舞台に2019年に自主制作したフィクション映画『春をかさねて』とドキュメンタリー映画『あなたの瞳に話せたら』が、今年の12月7日（土）より、東京のシアター・イメージフォーラムを皮切りに全国順次公開となります。初劇場公開・初自主配給で色々不安ですが、同時に楽しみです。

私は12歳の頃から、大好きな地元・大川を舞台に映画を作ることを夢見ていました。その2年後、震災によって私が撮りたかった「大川」は跡形もなく消えてしまいました。私の2歳下の妹も当時通っていた「石巻市立大川小学校」という場所で他の児童や先生方と共に津波の犠牲になり、とても映画どころではありませんでした。

それでも心のどこかに「私は絶対に大川で映画を撮れる

かと思っています。

今はフィクション映画の制作に注力していますが、大学時代にドキュメンタリーを撮った際の被写体や自身との向き合い方を忘れないでいたいのです。本当に沢山の失敗をして沢山の涙を流しましたが、今後も困難に臆せずぶつかって、強くなり続けていきます。

佐藤そのみ（さとう・そのみ）

1996年宮城県石巻市出身。日本大学芸術学部映画学科休学。在学中の2019年、フィクション映画『春をかさねて』、ドキュメンタリー映画『あなたの瞳に話せたら』を自主制作。卒業後、制作会社や映画配給会社に勤務する傍ら、2作品の自主上映を全国各地で行った。2024年、次代を担う若手映画作家の発掘と育成を目的とした「ndjc…若手映画作家育成プロジェクト」の製作実地研修を受ける監督の一人として選出される。

私がドキュメンタリー映画に出会ったのは、15年ほど前に名古屋市に住んでいた頃、友人に誘われて観に行った映画上映会でした。

その映画は、農業を通じた村づくり、地球温暖化解決策の植林活動、手漕ぎの船で海を渡る命懸けの冒険などを追いかけて、「生きている今を天国にしよう」というメッセージを届ける映画で、いろんな選択がある中で「後悔しない生き様」を見せてくれました。

ちよつと笑えて、人との繋がりもあり、でも社会問題にも言及していて、綺麗なことだけではない現実を突きつけられる場面もあり、ドキュメンタリーならではの嘘のない映画に心が動きました。

その上映会参加後には、1人でも多くの方に知ってほしいという思いから、友人たちと共に自主上映会の実施もしてきました。

地元仙台に拠点を移してから、上映会を通じて出会った方たちとの交流があり、ドキュメンタリー映画を通じて、人との繋がりもより深いものになりました。

そんな中で出会ったのがシネマクラドルでした。

シネマクラドルでは、プロ・アマ問わず、様々な方の映像作品を拝見させていただき、上映会後に開かれる意見交換会では、映画を好きな方たちならではの愛あるコメントが飛び交い、よりクリエイティブな作品にしたいという思いが伝わってきます。

全くの映画素人の私にとっても、シネマクラドルで視聴し意見交換した作品には思い入れがあり、その作品が劇場公開されたときにはとても嬉しく思いますし、上映された作品のエンドロールでシネマクラドルの名前を見つけて、皆さんと一緒に生み出した気持ちになり贅沢な思いをさせていただいています。

ドキュメンタリーならではの、人の営みを間近で感じられ、知らなかった世間や世界を教えていただき、シネマクラドルならではの、いろんな世界の方がたとの出会いもあり、唯一無二の会が毎回繰り広げられる。こんな面白いシネマクラドルは、これからも長く続いてほしいと思います。

金子直美（かねこ・なおみ）
仙台市出身。

1 ジャーナリストになったかった

1970年代北海道の産炭地で少年時代を過ごした私は、蒸気機関車（SL）を追いかけた。手にはOLYMPUS trip35。炭鉱事故、地底でたくさん命が奪われた。石炭は見捨てられ、人の暮らしは軽んじられた。幾多の労働闘争、炭鉱閉山は続いた。

ヘイエルダール『コンチキ号漂流記』、本多勝一『極限の民族』、小田実『何でもみてやろう』に出会った。壊されていく炭鉱施設、町、祭りを撮った。

ドキュメンタリー映画との出会いは、毎週木曜午後7時のテレビ番組だった。「驚異の世界」。私は夢見た。冒険をする。撮って書くジャーナリストになる。

2 「ほんとうのこと」のこと

人間は、ひとりでは非力だ。人間は、社会をつくり、知恵を合わせて暮らしてきた。これからもずっとそうだ。氷河期を乗り越えた人間は、たいしたもんだと思う。

知恵というものは、失われる。伝えることで残る。いつ

どんなことがあったか。事実から知恵を見出す。たくさん事実がある。いろんな視点によって「ほんとうのこと」が見えてくる。大きな声だけではなく、たくさん流布された言葉だけでなく、小さな事実から「ほんとうのこと」は見えてくる。

3 ドキュメンタリー映画

ドキュメンタリー映画は、動きや音をダイレクトに伝えることができる。時間を伴い、物語ることができる。可能性に満ちている。

世界の何に眼差しを向け、何に聞き耳を立てるか。ドキュメンタリー映画を観る人は、映像作家の眼差しと聞き耳をなぞりながら、新たなものを見出す。理解と誤解の中から、発見や発明がある。

4 たくさんの「ほんとうのこと」

1980年代、ぴあフィルムフェスティバルに憧れた大學生の頃。8ミリカメラは高額で、手にすることは難しかった。今日、携帯電話で動画撮影ができる。発信することさえ容易だ。幾多の動画が全世界の幾多の人から発し続けられている。事実の氾濫。そんな中、世界の何に眼差しを向け、

何に聞き耳を立てるか。何を意図するか。人類の知恵となる「ほんとうのこと」。気付き見極める柔らかさを備えたい。小さな勇気を絶やさないでいたい。

5 視界は広く

私は還暦を迎える。折り返し地点としよう。たくさん失敗を重ねてきたことを糧として、少年時代の自分をがっかりさせない足取りを進めたい。

若い頃、視界は狭かった。だんだん視野が広がったのは、たくさんのお会いのおかげだ。誰も孤立に陥らず、独りよがりにならないつながりとなり直しのゆとりを築くこと。たくさん「ほんとうのこと」に照明やマイクを当てる役割を担いたいと思っている。

土屋聡（つちや・さとし）

1965年北海道夕張市出身。宮城県大崎市在住。

美術作家。

じゃないか、と思いついたのです。それは文字通り、ただの「思いつき」でした。

その頃、偶然知人を通して紹介してもらった映像グループ「風の集い」に参加するようになりました。早稲田で月に一度、映画監督やカメラマンが集まり持ち寄った映像を観ながら話し合う場で、プロ・アマといった垣根はなく、様々な問題意識を元にドキュメンタリー作品を制作・発表している人たちが集っていました。それは刺激的で、映像を作る際の倫理観や社会を見る目を養い、ドキュメンタリー映画の作り方をいちから学びました。結局、2年間通った「風の集い」で、『高尾山 二十四年目の記憶』という映画を作り上げたのが、僕にとって最初の作品になったのです。

紆余曲折を経ながらこれまで映画を撮り続けてきましたが、原点は変わりません。この世界で声を上げられずにいる存在や、小さくさせられている存在の声を大きくしたい。人間も他の生きものもひとしく、深呼吸して生きられる社会にしたいという思いです。僕にとって映画はそのための闘う道具であり、薬であるのかもしれませんが。この世界を自分が生まれてきた時よりもすみよい世にして去っていきたい。それが僕がドキュメンタリーをつくる原点です。

わたしにとってのドキュメンタリー vol.12

穴戸 大裕

2025年1月23日公開

映画を通して、声の小さな者たちの声を大きくしたい、それが僕の映画づくりの原点です。

はじまりは東京にある自然豊かな山。高尾山の開発計画を知った大学生活6年目の時です。子どもの頃から動物の生息域や自然環境を守る活動をしたいと思っていたところ、2007年に「圏央道高尾山トンネル開発計画」が進んでいることを友人を通して知りました。

工事に反対する自然保護団体や地元の方々による長年の反対運動を知り、この問題を広く世間に伝え、工事を止めるにはどうしたらいいかと考えるようになりました。それまで、環境を考える勉強会やセミナーを開いたりしてきましたが、どんなに準備をしてもたとえば開催日に都合がつかなければ参加できない人はいるし、天気が悪ければ参加者も少ない。準備が実らないという悔しい経験を何度かしました。

そんな時に思いついたのが、ドキュメンタリー映画という方法です。映画ならDVDさえあればいつでもどこでも誰でも観られる。社会にある問題を伝える上で有効な方法

穴戸 大裕（ししど・だいすけ）

映像作家。学生時代、高尾山への開発とそれに反対する地元の人びとを描いたドキュメンタリー映画をつくり映像制作を始める。これまでの監督作に『犬と猫と人間と2 動物たちの大震災』（2013年公開）、『風は生きよという』（16年公開）、『道草』（19年公開）がある。最新作『杳かなる』が2025年2月8日より新宿K's cinemaにて公開予定。クマと人が棲み分けながら生きられる世界を模索する映画制作のため、東京・岩手の2拠点に暮らす。

わたしにとってのドキュメンタリー vol.13

海子 揮一

2025年3月4日公開

いにしえの世の人びとは「歴史」と「詩」を区別していなかったそうです。

物語をたて糸に、コトとコトをよこ糸に、一枚に編みあげられた大きな詩のタピスリーは、王国に属する人びとにとっての神話と心の地図になりました。後世の人びとがそれらを歴史と名付けたのです。

時間というのは相対的なもので、私たちは別々の時間を生きています。ところが「歴史」という考え方が生まれて、

時間と物語を分かち合えるようになりました。最初は口伝えて受け継がれていた歴史は集団が大きくなるにつれ、より多くの情報を伝えられるようになっていきました。洞窟の壁に炭やベンガラの絵の具で動物の絵を描いたり、粘土板や木の板に線を刻んだり…そう、「記録とメディア」によってより多くの人びとに、世代を超えて歴史や物語を広めることが可能になったのです。

しかしそれは世界の分断の始まりにもなりました。同じコトでもつなげ方が異なれば、全く別の意味や物語となります。また権力が集中すると「大いなる正しい物語（歴史）」は他の小さな物語を踏み潰してしまうことも起こります。支配された人びとは、やがてその人自身の耳や眼や声で身の回りの風景や出来事を捉えていたことを忘れ、だれかに与えられた物語やことばでしか考えられなくなってしまうのです。とても怖いことですが、これは古代や中世の話だけではなくありません。むしろ現代のほうが「物語」は急速で過激な荒波となって、世界の人びとの心を揺るがしているのではないのでしょうか。

映画や映像も、別々の時間に生きるひとりひとりを「ひとつの時間と物語」につなげる魅力的なメディアですが、一方では信じる物語の違いによって分断や争いを引き起こ

す力を持っています。それゆえにドキュメンタリーの中には小さな物語を丁寧ていねいに描いて、「大きな物語」に抗う人びとの剣と盾となっている作品がたくさん生まれています。

現代社会はますます昏く不透明くろくになっていく一方ですが、わたしは映画によって「歴史」が生まれる前の詩を取り戻せたら…と考えるときがあります。スクリーンの向こう側の風景や人物に声や体温を感じたり、観終わってだれかと語り合う時間の中に、わたし自身の生の在りかを見つけるのです。

わたしにとってドキュメンタリーとは未知なる他者や未来と出会うための灯火になっています。そして、暗やみの洞窟の壁画は、人が灯す松明たいまつの光があって見えてくるように、映画と人が共にある空間も同じくらい大切だと考えています。

海子揮一（かいこ・きいち）

1970年宮城県出身。建築家／プリコロール／クリエーター。環境とコミュニケーションをテーマにした建築設計活動の傍ら、映像製作・イベント企画・造形デザインも手掛ける。より自然に近い環境を求めて、2018年より仙台市に隣接する村田町寒風沢の古民家に拠点を置く。

わたしにとってのドキュメンタリー vol.14

倉澤範子

2025年3月30日公開

みやぎシネマクラドルとの出会いは、櫻井薬局セントラルホールで我妻和樹監督の『波伝谷はでんやに生きる人びと』を2015年12月に観たことからです。もともと映画を観ることは好きでしたが、みやぎシネマクラドルに参加してからドキュメンタリー映画に接することが増えました。今回、この文章を書くために記憶を辿り、参加してそんなに年月が経っていたんだ…と驚きました。

私にはもうひとつ聞き書きというライフワークがあります。聞き書きもドキュメンタリーも手法は違えど、その人をもっと知りたいという気持ちがあるように感じます。自分の知らない世界を他者から教えてもらおうという共通点もあります。また、相手のことを知ろうとしているのにおのずと作り手や書き手の人間性が滲み出てくるという部分も似ているように思います。

みやぎシネマクラドルで、これからも自分の知らない世界との出会いを楽しんでいきたいです。

倉澤範子（くらさわ・のりこ）

宮城県気仙沼市出身。仙台在住。社会福祉法人勤務・管理栄養士（2024年現在）。



飯川晃

みやぎシネマクラドル設立10周年、おめでとうございます。

私が初めて代表の我妻さんを認識したのは、仙台市の震災メモリアル施設「せんだい3・11メモリアル交流館」のスタッフとして勤務していたころ、2017年7月に『願いと揺らぎ』の小さな上映会があり、監督としていらっしやったときでした。当時会場で見かけた我妻さんは、緊張感のある状況をいくつも潜り抜けて来た経験を思わせる、風格のある人だなというのが第一印象でした。

そのときは挨拶をすることなく終わってしまいました。が、数年が経ち、私はメディアテークへ異動しました。そこで、シネマクラドルなどメディアテークの市民協働事業（メディアスタディーズ）の担当になり、初めて我妻さんへ連絡をとりました。

その頃はコロナ禍の底を脱したばかりの時期で、まだまだ世間の警戒心は強い状況でした。また、メディアテークは臨時休館が続いている期間でもあり、初ミーティングはパソコンの画面越し、しかもこちらはマスクをしていて、

どうもつかみどころのない、はじめましての挨拶をした覚えがあります。その時の我妻さんは思いがけず穏やかで朗らかで、初めてお見かけした際のちょっと話しかけにくいような第一印象は、良い意味で裏切られました。

その後施設が再開し、シネマクラドルの「映像サロン」が対面での開催となつてからは、イベントごとにメンバーの方が撮影した映像が公開されるのですが、担当者としてその場に同席しながら、毎回その迫力や緻密さに魅せられ、ひそかに心を揺さぶられていました。

もっと良いのは、みんなで一緒に映像を観たあと、メンバーのみなさんからハツとするようなコメントや、時に厳しくも熱意と愛情にあふれる質問が出たり、応える側も、やり遂げた爽やかな笑顔があつたり、一方で割り切れない表情が見て取れたり、温度のある応酬をなさっている様子でした。上映された映像に、さらに温度が加えられ練られていく気配に満ちた時間と空間が展開されていることは、もっと多くの方に知られてほしいと思います。

「映像サロン」は開かれた場です。地元の作り手の方だけでなく、さまざまな立場の方が一緒に運営しているのが意義深いところだと思います。もし関心をお持ちになった方は、ぜひ気軽に参加してみてください。エンドロールが流

れたあと、撮影者と同じ目線でやりとりできる貴重な体験は、ここでのしか味わえない特別な機会だと思っています。

飯川晃（いいかわ・あきら）

1981年仙台市生まれ。公益財団法人仙台市市民文化事業団職員。専門はアートマネジメント。これまで演劇やダンス事業の企画制作、震災メモリアル施設の展示企画などを手掛けてきた。せんだいメディアテークにてメディアスタディーズ担当（2021～22年度）。趣味はロードバイク、バスケットボール、自作ラーメン。わな猟師。

畑あゆみ

みやぎシネマクラドル設立10周年を迎えられたとのこと、誠におめでとうございます。

この会に所属する4人の映像作家さんが制作されたオムニバスのドキュメンタリー短編集『10年後のまなざし』を、山形国際ドキュメンタリー映画祭で配信上映させていたのだいたのは、2021年のオンライン開催時のこと。私はこ

の会の存在を、震災10年の特別企画として作られたこのオムニバス作品についてと同時にようやく知ったのだった。当時隣県で映画祭の仕事をしながらそれまで気がつかずになっていた自分の迂闊さを大変恥ずかしく思ったが、同時に、それぞれ独自の世界を持ち着実に経験も築きつあつた作家同士が自主的に横につながる、というその稀な試みがどのように起こったのか、に興味を惹かれた。

その経緯は我妻代表の個人ブログの中の「映像を通して繋がり、学び、支え合うコミュニティを求めて」（2023年9月24日公開）に詳しいが、第一に、東日本震災という大きな出来事を契機として、被災地としての宮城にその記録・表現活動が集まっていたことが関係しているという。第二に、その表現者、とりわけそれまでの業界に何の人的繋がりを持たなかった個人の作り手が制作・上映過程で行き詰まったとき、悩みや情報を分かち合うネットワークがあれば、という切実な思いがそこにあったという。

独立系の映画業界の人々がつながる場を提供する組織として、たとえばいまや全国組織である「独立映画鍋」などがあるが、このシネマクラドルは、基本的には宮城を拠点とした作り手が対象であり、せんだいメディアテークと連携しそのネットワークを広く市民に開いている点で、映画・

映像というメディアの公共性をより意識した活動である。不定期に開催されている映像サロンにはさまざまな背景を持った方々が参加されているようで、地域のミニ上映会、ミニ映画祭的な役割を果たしているという点で、近い仕事をする者としてとても頼もしく感じられる。

他の創作活動と同じく、映画制作も孤独な作業である。記録映画作家であればなおさら、自分が目の前の他者とのように出会い、どのような関係性を育て、向き合い、その姿を映像にどう定着させるのかを考え抜かねばならないだろう。自分の全人格が問われる恐ろしさに日々向き合いながら、作品を完成させ、そしてまた人に出会い、見せていく。戦後の映画作家たちは、出会い、考え、撮り、見せて歩くという行為すべてが「映画」という運動であると謳い、自ら実践していった。深く、孤独な作業を経て生まれた映像を通してつながり合う宮城発のコミュニティが、これからどう広がり、どんな成果を生み出すのか。一観客として、今後もその進展を楽しみにしている。

畑あゆみ（はた・あゆみ）
認定 N P O 法人山形国際ドキュメンタリー映画祭事務局長。

岐阜県出身。2011年より山形国際ドキュメンタリー映画祭事務局で働く。震災以降続く東日本大震災に関する特集プログラム「ともにある Cinema with Us」の運営に長く携わり、2014年には震災に関する記録映画を収集・保存する「311ドキュメンタリーフィルムアーカイブ」を立ち上げた。

自主上映作品データベース

みやぎシネマクラドルの会員が制作したドキュメンタリー作品の一部をここに紹介します。地域や学校で上映会を開いて参加者で語り合ってみませんか？

上映料等の詳細は各作品にお問い合わせください。



作品名 | 犬と猫と人間と2 動物たちの大震災
監督 | 穴戸 大裕
制作年 | 2013 年
分数 | 104 分
問合せ | info@inunekoniningen.com

大津波に襲われた宮城県石巻市。原発事故に翻弄されつづける福島県。東日本大震災では犬や猫、牛などの動物たちも被災しました。動物たちが伝える無言の声、その声に耳を澄まし動きだす人々。別れ、再びめぐり逢ういのちのいのち。動物たちと人々が過ごした3・11からの500日を見つめます。



作品名 | 道草
監督 | 穴戸 大裕
制作年 | 2018 年
分数 | 95 分
問合せ | info@michikusa-movie.com

自閉症と重度の知的障害があり、自傷・他害といった行動障害がある人。世間との間に線を引かれ、囲いの内へと隔てられた。そんな世界の閉塞を、軽やかなステップが突き破る。東京の街角で、介護者付きのひとり暮らしを送る人たち。関わることはしんどい。けど、関わりなくなることで私たちは縮む。だから人はまた、人に近づいていく。



作品名 | ^{やまおっさん} じんじんと山和尚 ～野点外伝2～
監督 | 海子 揮一
制作年 | 2023 年
分数 | 52 分
問合せ | yataiunion@gmail.com

コロナ禍中にある2021年。小さな寺の住職・佐藤正隆は、全国を旅する美術家・きむらとしろうじんのじんと出会い、アートイベント「野点」を通して産廃問題やコロナ禍で失われた土地や人のつながりを取り戻したいという想いを重ねる。イベントの記録とインタビューを中心に、直後に急逝した和尚の遺志を継ぐひとの姿を描く。



作品名 | 風は生きよという
監督 | 穴戸 大裕
制作年 | 2015 年
分数 | 81 分
問合せ | kazewaikiyotoiu@gmail.com

映画が映し出したのは、ふつうの街でふつうの生活を送る人びと。特別なことといえば、呼吸するための道具・人工呼吸器を使用していることくらい。淡々とその生活を映し出し、歩んできた人生を見つめた時、浮かんできたのは日常の尊さ。呼吸器から吹く風に乗る、つながりあう人と人との物語。



作品名 | 願いと揺らぎ
監督 | 我妻 和樹
制作年 | 2017 年
分数 | 147 分
問合せ | peacetree_products@yahoo.co.jp

『波伝谷に生きる人びと』の続編。コミュニティが分断された震災から1年後の波伝谷を主な舞台に、多くの困難に直面する人びとの復興への願いと、それぞれの立場や想いのすれ違いから来る心の揺らぎを、地域の伝統行事「お獅子さま」復活の過程を巡って描き出す。震災前後の映像記録から人と人との共生を見つめた渾身の一作。



作品名 | ^{のだてがいでん} 野点外伝
監督 | 海子 揮一
制作年 | 2017 年
分数 | 33 分
問合せ | yataiunion@gmail.com

全国各地を巡りながら、人びとの土地への愛着や記憶を掘り起こす、美術家・きむらとしろうじんの「野点」。その開催地となった宮城県の角田市と丸森町を舞台に、一日限りの「ええ風景」のために集まった美術家と参加した人々の想いと声が交差する、地域アートプロジェクトの10ヶ月を追ったドキュメンタリー。



作品名 | ^{はでんや} 波伝谷に生きる人びと
監督 | 我妻 和樹
制作年 | 2014 年
分数 | 135 分
問合せ | peacetree_products@yahoo.co.jp

東日本大震災の津波により被災した宮城県南三陸町の小さな漁村「波伝谷」の、震災までの3年間の日常を追ったドキュメンタリー映画。厳しくも自然の恵み豊かな土地で、住民同士支え合いながら生きる波伝谷の人びとの姿を通して、時代の流れとともに変わりゆく地域コミュニティのありよう、沿岸部の被災前の営みを描く。



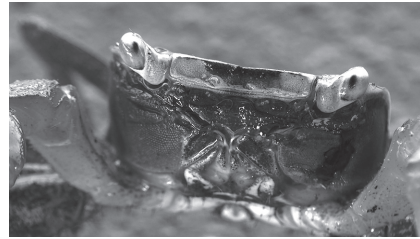
作品名 | ^{ちこり} 千千里の空とマドレーヌ
監督 | 我妻 和樹
制作年 | 2021 年
分数 | 113 分
問合せ | peacetree_products@yahoo.co.jp

東日本大震災の津波により被災した宮城県南三陸町を舞台に描かれる、夢を追うパティシエ家族と彼を応援するボランティアたちの物語。主に震災1年後の人びとの葛藤を軸に、被災地における「支援」や「ボランティア」といったもののあり方を問いつつ、どのような人の交わりが町の復興を支えてきたのかを見つめる。



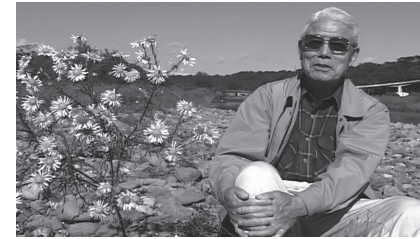
作品名 | たまねこ、たまびと
監督 | 村上 浩康
制作年 | 2022 年
分数 | 91 分
問合せ | mura-h@theia.ocn.ne.jp

多摩川の河川敷に捨てられた猫たちとホームレスの人々の支援を 30 年以上に渡り行なっている小西修さんの活動を記録した作品。河川敷に捨てられた猫たちの過酷な現実（餓死や虐待）と、猫を巡って繋がる人々の暖かなコミュニティを描く。



作品名 | 蟹の惑星
監督 | 村上 浩康
制作年 | 2019 年
分数 | 68 分
問合せ | mura-h@theia.ocn.ne.jp

多摩川河口の干潟で 15 年に渡って独自にカニの観察と調査を続けている吉田唯義さんの活動を記録しながら、都市環境の中で生きる様々なカニたちの驚くべき生態を描いた作品。ミクロの世界からマクロが見える全編蟹づくしのワンダームービー。文化庁優秀映画賞受賞。



作品名 | 流 ながれ
監督 | 村上 浩康
制作年 | 2012 年
分数 | 85 分
問合せ | mura-h@theia.ocn.ne.jp

神奈川県愛川町を流れる中津川で水生昆虫の調査と絶滅危惧種の植物の保護に取り組む二人の老人の姿を追ったドキュメンタリー。巨大ダムの完成に伴い、その下流で起こる環境の変化を、小さな生き物たちを見守る老人の視点から描く。文部科学大臣賞受賞。



作品名 | 杓かなる
監督 | 穴戸 大裕
制作年 | 2024 年
分数 | 124 分
問合せ | info@harukanaru.com

全身の筋力が徐々に弱まり、病状の進行によっては声も失われ、意思を通わせることもむずかしくなる難病 ALS（筋萎縮性側索硬化症）。生死のはざまに揺れる一人の女性の 3 年半にわたる別れと出会い。“私”を失いつづける日々に、言葉がのこされる。言葉も失われた先で、人はいのちに触れる。



作品名 | 新地町の漁師たち
監督 | 山田 徹
制作年 | 2016 年
分数 | 89 分
問合せ | info@yamadatoru.com

東日本大震災の津波と福島第一原発事故により深刻な被害を受けた福島県・新地町。汚染水問題に揺れる海で、本格操業を目指し奮闘する漁師たちの葛藤と努力、汚染水対策「地下水パイパス計画」を巡る交渉の過程を描いたドキュメンタリー。



作品名 | あなたのおみとり
監督 | 村上 浩康
制作年 | 2024 年
分数 | 95 分
問合せ | mura-h@theia.ocn.ne.jp

宮城県仙台市に暮らす父親の看取りの過程を、息子である監督が克明に記録したドキュメンタリー。自宅での介護に追われる母親の時にユーモラスな言動や、看護師や介護士たちとのコミュニケーションから高齢化社会が抱える様々な現実が見えてくる。文部科学省特別選定作品。



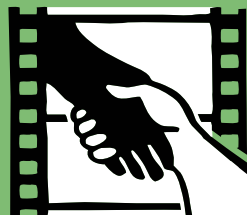
作品名 | 東京干潟
監督 | 村上 浩康
制作年 | 2019 年
分数 | 83 分
問合せ | mura-h@theia.ocn.ne.jp

東京の多摩川河口の干潟でシジミを獲りながら、捨て猫たちと暮らすホームレスの老人を追ったドキュメンタリー。老人の暮らしと人生の軌跡から、日本の戦後史と現代社会が抱える様々な問題が浮かび上がる。新藤兼人賞金賞受賞。



作品名 | 無名碑 MONUMENT
監督 | 村上 浩康
制作年 | 2016 年
分数 | 70 分
問合せ | mura-h@theia.ocn.ne.jp

岩手県盛岡市の桜の名所「高松の池」に集う人たちにインタビューした作品。それぞれの人がそれぞれの視点で池を見つめ、その証言から池の歴史や環境、更には戦争や震災など、過去と現在を繋ぐ様々な事象が浮かび上がる。



みやぎシネマクラドル

【編集後記】

本記念誌は、2025年8月に開催予定の10周年上映企画「ドキュメンタリーが開く世界」みやぎシネマクラドルの10年とこれから」にに合わせて作成しました。会の歩みや会員・関係者の声を記録した本誌を通して、多くの人に当会の活動を知っていただけたら幸いです。

この10年、当会では作り手と市民が協働し、映像を通してより良く生きるための方法を考える場づくりを活動の大きな柱としてきました。そこでの対話と学び合いの姿勢は、映像メディアがどんどん多様化し、それを扱う人の意識もより問われるであろうこれからの時代において、変わらず貫きたい会の存在意義とも言えます。

今後も地元宮城のみなさまと一緒にこうした場づくりを続けることで、地域の未来に何か意味のあるものを繋いでいけたらと願います。

最後に、会の立ち上げ以来、当会の活動を支えてくださった皆様に改めて御礼申し上げます。

メディア スタディーズ

メディアスタディーズとは、メディアを活用して地域の文化をつくる、さまざまなプロジェクト群の総称です。本書はメディアスタディーズのプロジェクト「みやぎシネマクラドル」の活動の一環として発行されました。

みやぎシネマクラドル10周年記念誌

ドキュメンタリー・ダイアログス ～作り手と市民が繋ぐ未来への対話～

2025年7月発行

企画・編集	みやぎシネマクラドル せんだいメディアテーク
デザイン	渡邊 武海
表紙イラスト	海子 揮一
発行	せんだいメディアテーク 〒980-0821 宮城県仙台市青葉区春日町2-1 tel 022-713-4483 fax 022-713-4482
印刷	株式会社グラフィック
問い合わせ	みやぎシネマクラドル m.cinemacradle@gmail.com